恋愛関係崩壊時の状況がその後の過程に及ぼす影響について

専攻　学校教育学専攻
コース　教育コミュニケーション
学籍番号　M10008C
氏名　　藤原希

【研究目的】

失恋というテーマは親密な対人関係の崩壊の一様相として、これまで様々な側面での研究が進められてきた。しかし、失恋後の感情や行動などの具体的な反応や、その後の立ち直り過程に影響を与える具体的な要因の検討については研究数が少なく、また少ない研究の中でも結果が一貫していない。

本研究ではその点に焦点を当て、恋愛関係にあった相手からの申し出により関係崩壊を迎えた人を対象に、関係崩壊後の具体的な悲哀感情・行動的反応を検討した。その際、関係崩壊時における予期、話し合い行動の有無、相手への夢中度、交際期間の長さを考慮し、これらの状況によってその後の感情・行動が異なるかどうか、また関係崩壊時の状況や崩壊後の反応によってその後の立ち直りが異なるかどうかということについても検討した。

【調査】

(1)調査対象：東北・中部・関東・関西・中国・四国・九州地方の、25歳以下の大学生、大学院生、専門学校生、短大生860名のうち、特定の異性と恋愛関係になった後、相手側からの申し出により関係崩壊を経験したことのある288名

(2)調査時期：2011年8月～10月

(3)調査内容：特定の異性との恋愛関係崩壊についての質問紙調査

【結果】(1)因子分析

まず、関係崩壊後の感情・行動的反応を測定するものとして、Bowlbyの理論に基づいた対象喪失の視点での尺度を新たに作成した。因子分析の結果、相手への思慕が続く「思慕」、相手に執着する「執着」、恨みや屈辱感を感じる「悪感情」、恋愛関係時と状況を変えようとする「一体感の排除」、相手を敵視し過小評価する「悪玉化」、関係崩壊の事実から目を背けようとする「現実逃避」、自責の念や罪悪感などを持つ「引責」の7因子を抽出しその後の考察に用いた。

(2)各要因とその後の感情および行動的反応の関連

交際期間については男女共に「引責」の間に正の相関がみられ、交際期間が長いほど引責行動を取りやすい傾向にあることが示された。また、女性に限って「思慕」、「執着」との間に正の相関がみられ、交際期間が長いほどに思慕、執着行動を多くとる傾向が示された。夢中度については男女共通して「思慕」「執着」の2因子間に正の相関がみられ、夢中度が高いほど関係崩壊後にそれらの行動を多くとる傾向がみられた。加えて男性は「引責」との間に正の相関、「悪玉化」との間に負の相関がみられ、夢中度が高いほど引責行動をとり、また相手を敵対視することもないということが示された。かわって女性は「現実逃避」との間に正の相関がみられ、夢中度が高いほど関係崩壊の事実から目を背けようとする傾向がみられた。予期の有無については男女共に「思慕」「執着」因子との間にそれぞれ関連がみられ、予期があった人よりもなかった人のほうがそれらの行動を多くとる傾向にあることが明らかになった。話し合い行動の有無については、男女ともに「悪感情」「悪玉化」において関連がみられ、話し合い行動をとった者よりもとらなかった者のほうが、相手を恨んだり不幸な自分に浸ってしまう傾向があることが明らかになった。

(3)各要因とその後の立ち直りの関連

交際期間と「立ち直り」の関連については、男性は負の相関、女性は正の相関であり、男性は交際期

間が長かったほうが立ち直りが困難であり、逆に女性は交際期間が長かったほうが立ち直りが容易である傾向が示された。また、女性にのみ「冷静回顧」との間に負の相関がみられ、交際期間が長かった者ほど関係崩壊の事実を冷静に思い出すことができない傾向が示された。夢中度については、男性は相手との関係修復を望む「修復希望」との間に正の相関がみられ、夢中度が高いほどに関係を戻したいと思う気持ちが強い傾向にあることが明らかになった。また女性は立ち直っているかどうかの「立ち直り」との間に負の関連がみられ、夢中度が高かった方がその後の立ち直りが困難である結果が示された。予期の有無とその後の立ち直りについては何も関連がみられなかった。話し合い行動については男女共に相手との関係崩壊を冷静に思い出せるかどうかの「冷静回顧」の項目にのみおいて、話し合いに正の主効果が認められ、話し合いなしで関係を終えた者よりも、話し合いをして関係を終えた者のほうが関係崩壊の事実を冷静に思い出すことができているという傾向がみられた。

（4）関係崩壊後の感情および行動的反応とその後の立ち直りとの関連

男女共に崩壊後に思慕感情を強くとった者ほど関係崩壊のショックから立ち直りにくい傾向にあり、一体感排除行動をとった場合、関係解消を冷静に思い出せず、また悪感情を強く持った場合、相手の幸せを祝福できない傾向にあることが明らかになった。加えて男性の場合、執着と冷静回顧の間、悪玉化と祝福の間、悪感情・一体感の排除・現実逃避・引責と立ち直りとの間に相関がみられ、女性は悪玉化と修復希望との間に負の相関が、立ち直りとの間に正の相関のみが認められた。これらの結果から、男性は関係崩壊時の状況とその後の感情および行動的反応よりも、感情及び行動的反応とその後の立ち直りの関連において強い結びつきがあるといえるだろう。女性は逆に、関係崩壊時の状況とその後の感情および行動的反応の関連は強いが、感情および行動的反応とその後の立ち直り過程の関連については男性よりも弱い傾向にあることがいえる。

（5）関係崩壊後の感情・行動的反応によるタイプ検討

関係崩壊時の状況とその後の過程の関連についてタイプ分けを行い、反応低群、反応中群、反応高群の３群が抽出された。低群は喪失の予期があり、相手への愛着の程度も低かったためショックが少なく立ち直りやすいことが、中群～高群は喪失の予期がなく、相手への愛着の程度も高かったためにショックが大きく、立ち直りにくいことが明らかになった。

【総合考察】

本研究の成果として、失恋研究において取り上げられていなかった予期の有無や話し合い行動の有無とその後の過程との関連を見出したこと、失恋を対処喪失の視点で捉え検討したこと、崩壊時の状況とその後の過程について、性別役割認知や性別役割葛藤の視点を踏まえながら性差による細かな検討を行ったことが挙げられる。いずれも、先行研究になかった新たな様相を見出すことができた。

また、恋愛関係にあった相手に大きな愛着を抱いていること、そして関係崩壊を迎えたのちに訪れる悲哀感情や行動的反応が大きく、しいては思慕や執着行動が多くとられた場合を条件に、それらの失恋経験を愛着対象の喪失＝「対象喪失」といえるのではないかということが示唆された。そしてその感情や行動的反応に影響を与える要因として、予期があった上での関係崩壊なのか、また崩壊の際に話し合い行動はとられたのか、相手への愛着の程度はどうであったのかなどという崩壊時の状況や性差を挙げることができると考察された。

主任指導教員　中間玲子
指導教員　　中間玲子